

細谷昂著

## 『庄内稲作の歴史社会学—手記と語りの記録—』

御茶の水書房 2016年9月

松村 和則

抽象度を上げない努力(=「実践」)と細谷社会学「細谷さんは人びと(=農民)を疑ったことはなかったのですか」

この胸元へのシュートぎみの直球を投げたのは、徳野貞雄さんだった。仙台で開かれた「村落研究を語る会」最終回(2019.6.23)、このような場でこの投球術ができるのは氏を除いてはいない。細谷さんは、空襲の経験を述べてファッショ的状况を作り出した村を壊すべきだと考えたこともあったと、このきわどい球をのけぞることなく応じた。

初期マルクスの研究で城戸賞を得た細谷さんが30歳台から半世紀をかけて庄内地域に通い続け、重厚なモノグラフ研究を残してきた原点がこの問いと応答に含まれています。「生活者(の生活)に寄り添う」というテーゼは、有賀生活論を継承・展開してきた論者たちの揺るがない基本ですが、「マルクスに多くを学びました」と言われる細谷さんも、同様の研究姿勢を庄内研究の出発点から持っておられた。佐藤繁美さんという長年の「道連れ」ともいべきキーパーソンばかりでなく、本書には実際のインフォーマントのお名前が記されていることにもそのことがあらわれています。

本書と姉妹編をなす『家と村の社会学—東北水稲作地方の事例研究—』2012(要を得た解説は佐久間政広『社会学研究』97号2015所収)はもちろんですが、私は『稲作農業の展開と村落構造』1975を庄内研究の嚆矢として注目します。菅野正先生(ウェーバー研究)、田原音和先生(デュルケム・ブルデュー研究)との共同研究ですが、最若手の細谷さんに「まとめ」を任せる二先生とのチームワークの良さが際立った仕事です。当時の福武直研究室の共同研究も精力的でしたが、理論的な立場を違えつつも共同で同一地域を継続調査するスタイルは仙台に集う社会学者独特のものでした。庄内への列車の堅いシートで向かい合い、お互いの理論研究から「距離」を取りつつ、庄内のことのみならず日本社会の「基層」を語り合うことの楽しさを、酔客を装って幾度となく語ったのは田原さんでした。また、理論研究から

「距離」を取るというのは、言葉を変えると「抽象度を上げない努力」をすることとつながります。

さらに、三先生の関心は当初から港湾都市酒田から離れた「川南」の林崎にあったこと、つまり、地主制の未発達な自小作上層農からなる村の「部落態勢の変革」力、つぎのようないいかえが許されれば、人々の「創造力」「転換力」に希望を探ったともいえます。むらの「ワケイシュウ(=シンショをもたない「若者」)」へ反発と同時にある信頼が、庄内の各地で「研究会(すげ笠会など)」と称する家単位・個人単位の組織を創発させました。かつて、私のような駆け出しの院生を信頼し仲間同様に扱う村の若い人がいたことを思えば、それが先生方への信頼と期待につながっており、ひいては「大学」という機関へのそれともなっていたのです。その期待を肌身で感じていたがゆえに、「むらは民主的だ」という繁美さんの一言を細谷さんは疑いなく受け入れ、姉妹編を含め1500頁を超える大著で応えました。

この本を手取る人は、有賀さんの『家—「日本の家族」改題—』、中野さんの『日本社会学要論』や鳥越さんの『家と村の社会学』を読み修士論文を仕上げている院生だろうか。環境問題をテーマとしてフィールドに入っても、現場で考えるとどうしても家や村(=部落)を考えないと理解が及ばないという状況で、漸く本書が視野に入ってくるのだらうと思います。そのフィールドでの体験がこの大著を読み解いていくには必要で、さらに細谷さんが歩いた道をそのまま辿ることが最短であると感じます。つまり、なぜ「部落ぐるみ」の集団栽培という家経営のスタイルが庄内で成立したのかという課題を追求していた1960年代の若き細谷さんになり、どのように村を考えていたのかと時代を追って読み進めるのが良いと思います。「無償労働組織」としてシャープな視線で家と村を考えていた時代からの変遷を詳察し細谷社会学の社会学を試みることも理解を深めます。しかし、間違えても前著2012の第3部や本書の終章、つまり学説史と細谷さんの整理を読んで理解したと思わないことです。

とはいっても、今の時代になぜ家と村なのかと、まず問わねばなりません。それについては、日本の農業は今でも家と村が担っており、資本主義的経営の「食糧生産」が安全性・安定性をもたらすものではないこと。また、日本文化(→「日本人らしさ」)は日本の農民らしさであり、それが日本社会の「基層」を形成しているとの「類推(=今西錦司)」が先行してあるのです。

さて、南部藩の特殊事情も影響した大家・斎藤家の有賀同族団研究を批判的に検討するため、この系譜に連なる家研究は「家を家族の一形態」としており「経営を営んでいる家族」という視点が弱いと考えて庄内研究は始まりました。前著2012はこの家と村を社会的事実から追いつけていったのですが、本書は農民や彼らのリーダーの「思い」を掘り下げて課題に迫ろうとしたのです。いうなれば、有賀さんの「生活意識」に内実を与え、「村の生命力」と自ら課題として残してきたブラックボックスの内部を埋める仕事をする中で本書が出来上がっていきました。

調査地は、最上川の南北で特徴が違うといわれる2地域(「川北」酒田市、「川南」鶴岡市)を取り上げ、市内在住の大地主が展開した旧北平田では農民運動を取り上げ、「川南」の京田・林崎では家格にとらわれない自小作中心の村、つまり「小経営農民の家々からなる村」に焦点を当てました。前者の北平田の農民運動は、酒田市在住の地主たちに対して零細小作貧農ではなく、「萌芽的余剰」を手にした自小作・中上層農であり「部落ぐるみ」で運動を展開したと述べられています。また、興味深いのは在村地主松沢家の文書と「悪名」高い「特高」文書を突き合わせて、中央政府の力を借りずに日本一の本間家が地方権力を総動員して「乗り切ろう」としていたとの記述は、類推的客観性の具体的な資料操作です。

地主の心の中を見透かすような表現も「データ」という社会学の枠を超えた操作であり、「部落態勢の变革」をめざすため「東亜連盟のイデオロギー」が農村工業の起業となったのではと、すなわち「下から」のエネルギー、農民的インテリゲンチャへの強い関心も表明していることが、実践性の顕れだと思えます。また、庄内農業を推進しようとする「天狗」(=篤農家)たちと村の人々を結びつける「地域メディア」やマス・メディアに60年代初期からこのグループが注目してきたことは、農村社会学全体を考えると忘れてはなりません。

本著及び姉妹編をはじめ膨大な庄内研究を支えた

のは細谷さんの次のような類推ではないかと思えます。経営が自立化するイエにあって、ムラはその経営に参画することはないという竹内利美先生のイエ・ムラ分離論は、戦後の農業をめぐる厳しい諸状況の下では覆されてしまう。「林崎の92町歩全体をどうするか」という幕藩制期以来の村の経験が「部落ぐるみ」の行動となって現前化するのです。農協主導の愛知、農家の相対で乗り切ろうとした蒲原とも異なり、「部落を場」として乗り切ろうとしてきた庄内農業は、育苗も部落で行うことを選択して独自の集落営農(集団栽培)、さらには構造改善事業を生み出していったのです。

明治期以降乾田馬耕の農法を進化させ、経営の合理化・自立化する庄内の農家を覆ったのは、軍靴の高らかな音とともに切実となる労働力の不足であり、生産力の拡大への内外の要請(「自作農創設」「4石の壁」)であった。その際、戦時下の「国策」でありながら、その自作農創設の全体像は戦後の農地改革へと連続していくものであり、大地主・本間家は「すでに大正末期から」すすんで奨励してもしました。そのことを細谷さんは「もっと大きな意味での時代の趨勢」を読み取り、庄内の動きは特殊だと外から述べることもできるが、内的な視点では「質的に普遍的意味」を示していると述べています。

理論的課題への応答だけなら、「庄内の村つまり部落が」と自らがそれまでの記述を纏める細谷さん独特のくせが読者の理解を助けてくれるので、その整った記述(p484p485など)、本書の全体像を概観した終章を読むことで良いと思えます。私は、細谷さんが生涯をかけて庄内研究を続けたそのエネルギーがどこから来て、何処へ行こうとしたのかを知りたいと思いました。この国のリーダー、それは国政のそれではなく、地方のリーダー・インテリゲンチャはどうあるべきか、彼らを生み出した篤農家とはどのようなものだったのかを考えながら全編を読むことがそれにつながると思えます。「大学の先生は困ったときに助けてくれる。大事にしなければ」という庄内の人々に、抽象度を上げない研究実践に生涯をかけることで応え、「村は残すべきだ」と結ばれています。

この膨大な庄内研究は、鈴木・有賀のユニークな日本社会学のほとんどの課題に応えようとし、それらに独自の回答をなしました。私は、それらの中でも太い線分としてトレースされる細谷社会学の「実践」性を自らの現場で深めていくことに残りの時間をかけようと思えます。(株)Green Co. Tsukuba)